



(一)

社会論的な断想

木田徹郎

アメリカの理論社会学の第一人者タルユット パーソンスは社会を靜態的に、色々な型やグループの類型等に依つて分析せず、もつと動的に、或いは具体的過程的に「社会的行為」(Social action)の諸相に於て把えようとしてゐる。現実の行為は勿論極めて複雑なものだけれど、一応或る程度首尾一貫したシステムとなつて行動の体制(System of action)となつてゐる。だからある一定の時と一定の場に於ける現実の行為システムを分析し理解しようとする、それは時間の経過や事態の変動に伴なつて変化し行く色々な変数の複雑な諸關係を考察しなければならぬことになる。即ち所謂プロセスの力動的分析ということになる。

例えば社会事業に於て取扱うケースの分析は当然斯様な極めて複雑な記述と分析なのである。實際アメリカの優れたケースワーカーの記録を見てみると次ぎから次へと一見何げ

ない質疑応答が取りかわされて行く内に、クライエントの事態が環境的にも亦内面的にも一歩一歩明らかになつて行く。その会話の内容は或いは本人の自己意識の次ぎには母親の自分に対する態度に移り、職場のことが出るかと思つて續いて自分だけの将来の生活設計が出る。誠にタンゲイすべからざるもので天才的と言うより外致し方あるまい。然も之等の何げなく又はとんでもない方面に飛び移る会話の内に、必ず最も適確に事態の真相が鮮明され、心理の深層へ深層へと洞察のメスが加えられて行く。

よけいなことだが、未知なものに対し、殊にそれが次から次へと快刀乱麻をたつて行くこと位面白いことはないのだから、ケース記録を読む面白さは丁度探偵小説のそれと同じのような気がする。

然し斯様に自由自在に、本人とその環境の全体の中を飛びかわし乍ら心理の底へ底へと進み、その間にクライエント自身が自律性と統合とを恢復し、自ら問題を解決しようとする

のである。焦点はあく迄人間であつて問題であつてはならない。「一つの特殊な問題を解決するのが問題ではなくて、個人を援けて成長させ（只眼前の一つの困難だけでなく）現在及び将来の問題に対し対抗出来るようにさせるのが目的である」とロイジャーは言う。

だから只知識として本人の置かれている場と本人自体の心理事態を説明し、それが知的に解つたとて何の好転も無い訳で、——自分の行為が悪いことと知つていない怠け者はないのでだから——会話はどうしても知性に呼びかけるのでなく、場の感情的な面に働きかけるように進められる。斯様なケース記録の書き方は勿論、つまり対談の場面に於けるワーカーに最も現実的な、素直な物の考え方でケース・レコード研究の有効性は茲に存るわけである。

だが然し幾ら素直で、有効だといつても、之等を一層深く理解し或いは実際に各種の質問方法の内与えられた事態では何が選ばれるべきかと云う極く自然な必要から考えても、探偵小説だつてトリツクの分類や密室の造り方の評論があり之が又却つて素晴らしい面白いのだから、個々具体的なシチュエーションから引離しての行為の一般理論の要求があつても少しも不思議ではないだろう。

だからパースンズも、現実の行為は一つのシチュエーションに於ける複雑な行為複合のプロセスだけだと、「我々は変数其れ自体を一つ一つ取り出して孤立化し明確にするよりも

以前に、諸変数の複雑な体制——システムとは経験的な具体的現象の複合の中に在る依存的な諸変数の或る程度限界付けられた自足的な諸関係の意味である——に於ける色々な変化を研究することは不経済なやり方だ。そこで我々は諸変数の特殊なコンビの研究とどうして之等のコンビが変化し相互影響するかと云うしつかりした基礎から始めるべきだ」と述べている。斯くて一箇特定のシチュエーションと結びついた具体的な行為の理解の爲めに、却つて行為の一般理論から始めるべきだという考えが出て来ることになる。何故なら行為の一般理論の座標軸 (frame of reference) は理論的には如何なる人又は多数の人々の総ての行為の過程や部分に応用出来るものだからである。それはつまり概念的な図式 (scheme) だからなのである。

- 彼は行為概念に左の四つの点を考える。
- (1) 行為には動機がある。
 - (2) 行為はシチュエーションの中に起る。
 - (3) 行為は規範的に統制される。
 - (4) 行為は目的達成乃至予期的状態に指向する。

(二)

現実の具体的な行為の体制は心理的・社会的・文化的の三つの面を持つている。つまり人間の行為の概念的図式は、行為を構成する三つの面の複合である。第一は一人の行為者

個人的体制
社会的体制
文化的体制

(actor) の諸行為は、ある程度まとまつた指向を持つていると、いうことで直ぐ解るシステムである。之は其の動機 (motivation) のプロセスに依つて色々と分化し統合する体制であり、パーソナリテイのシステムである。

第二は共通のシチュエーションに置かれた複数の行為者の行為で、相互作用のプロセスであり、之が色々に分化し統合し行く所謂「社会体制」である。此の両システムが切り離れ難く結びつき相互に依存し合つてゐることは云う迄もないが、或る意味で此の兩者よりも一層緊密に結合し入り込んでゐる第三のものは文化のシステムで、之は例えば文化的伝承としてパーソナリテイ体制、社会体制の双方に指向の目標を与えると同時に、諸行為の指向に於てはその要因として入り込んでゐる。だから文化のシステムは価値観乃至価値指向 (Value-Orientation) に結集して行く。

我々の現実の行動は常に此の三つの次元にまたがり、例えば自分の生理的ニードを基底とする個性的な方法ではあるが学生を前にする場に於て教師たる役割を、その場の役割期待に応じ乍ら行い、同時に斯る社会的システムの特殊のメカニズムたる経済的行為として、且つ又、より現実的より社会的な価値観の規制を受け乍らシチュエーションナルに実践して行くのである。

此の中で、パーソナリテイは早くから心理的な乃至生理的社会的な統一体として諸行為のシステムとされて来た。例えば

昔の本能説が一番よく之を説明する。尤も之では個体の可塑性や学習ということが旨く説けないし、殊に最近の文化人類学の唱導する文化の多様性・相対性とはどうしても合致せず破れ去つて了つた。

そこで現在の見方は斯様な固定した堅い殻を持つたものではなく只行動指向の継続的な組織化ということと統一性を持たせてゐる。云う迄もなく此の中心は生理的システムで之は環境との代謝というニードの体制である。飲食のニード、睡眠のニード、呼吸のニード等は皆夫々個性的なものではあるが之等の生理的ニードが實際行動となつて具顕するには必ず、行為の指向や行為様式が伴い、同時に具体的シチュエーションに於ける条件で影響を受ける。つまり行為たる限り目標が含まれ、その際に文化体制がパーソナル体制中に入り込んで、之に客観性が与えられつゝまり社会化するのである。實際社会関係に対するニードさえ出て来る。だから元来色々なニードは生理的なプロセスによつて組織化されたものではあつても、結局此の生理的プロセスのままでは行為となる要因を持たないことになる。

即ち元来ニードは行為を決定するのだけれど、行為自体のシチュエーションが、その決定に際して方向や様式を修正するようになる。或いは寧ろニード自体さえ修正され又は少なくとも行為に及ぼすその影響は修正されるのである。此のプロセスに依つて「ニード性向」(needisposition) が段々出来

上つて行く。

此のニード性向の体制は社会体制・文化体制と一応限界を劃し乍らも、上述の如く関連し合い發展し行く力動的なシステムで、パースンズは之はパーソナリテイの動機の單位に二つの方向が在ることを強調する為めに選んだ言葉で、一つは有機体たるパーソナリテイの均衡の方向、他は色々な目標に關係して初めて行為となる方向であると云う。つまり生のニードのコンビより一層高次の組織であり、只の生理的ニードからは出て来ない、パーソナリテイの動機や評価乃至選択の部面を含むものである。

斯くて体制論的立場からすれば、学習は只の知識の附加ではなくて、パーソナリテイシステムの一般化の程度の増大であり、ニード充足の為めの弁別、選択・評価をする新しい方法の獲得であり、新しい指向の形相化なのである。

此の過程の中に動機は漸次社会し、目的が益々分化し、シチュエーションや機会を条件として種々のニード性向が分化して行く。斯うなるとそのシステムの限界内で不安や葛藤も生れ、同時に防禦や適応のメカニズムが出来る。

(三)

扱て然し幾ら斯様な方向の研究を深めて行つても、最初述べたように現実の行動で理解する図式にはなり得ない。何故かと云えば凡有る具体的行動は必ず同時に文化体制であり、パ

ersonality セットであり社会体制であるからである。

實際総ての行為は全くの単一の個人の資格で、純粹の個人的目的で行われることは無い。一般に人間の行為は必ず或る行為者の行為であつて、その行為者は何か一つ又はそれ以上の社会的役割の資格に於て行為する。妹として、友人として、学生としての行為であり、又その行為は「役割期待」(Role expectation)の上に立つものでもある。

斯うして、パーソナリテイ体制は社会体制へ移る。社会体制は前者が一人の行為者のシステムであるに反し必ず複数の個人の相關行動のシステムであり、複数の行為者の關係なのである。此の複数の人々の行為は当然一人の行為者のパーソナリテイ体制を作つているのと同じその行為であるから構成内容から云えば双方共同一なのだ。だから両者の違いは体制の組織化の焦点と実質的な操作的機能に在ると云える。

社会体制に於ける最も重要な概念的單位は人格体制の人間と異なる「役割」(Role)である。個人は役割によつてその個人を作り上げてゐる諸單位行為の統一体制から、その個人自体が含まれ参加してゐる關係に於ける統一体制に移行するわけである。役割もパーソナリテイと同様只の抽象概念と見てはならない。自我の行為体制の全体の中で一定の枠を設定し、他の境界を保ち乍ら自己保全する限界維持の体制で、集合体の行為の内容たる自我の関心に基礎を置く選択・メカニズム乃至力動的過程である。だから個人迄溯れば各自の行為

の役割期待のモットとなり、他方多くの役割の配置の体系に
 発展し、現存文化型と一改した場合には制度となり、道徳的
 に承認されれば価値指向となる。

社会体制に於ける役割構成もニード性向と同様発展し行く
 選択であり評価であるが、此の場合の選択は役割期待の力に
 依つて、社会体制内の個々行為者間にバラバラではなく、各
 行為者の価値指向は共通システムとなるように発展し、規制
 されて行く。茲に行為に對する社会的報酬や便宜供与という
 機能のメカニズムが出て来る。

だから社会体制は役割の型組により、血縁や地縁の上に焦
 点を置いて組織化され、更に社会的報酬や便宜供与のメカニ
 ズムを経て、一システム内の競争や葛藤乃至デイスオルガニ
 ゼーション等を規制する構造に発展し、役割は高度に統一化
 されて制度となり、更に高次の社会構造の秩序単立となる。

(四)

結局個人の選択的行動から生れる役割期待を要素として出
 来上つた役割を構成単位とする社会体制は、更に価値指向の
 型を制度化し広汎な統一体となる。此の二つの体制の双方に
 は共に、文化体制が入り込み内在化して発展するのである。

パーソナリティ体制に於ても子供は成人からその選択の指
 向方向を学び社会化する。又役割期待が生れ共通の社会体制
 が出来る。然し総ての社会で、より固定的な、より共通の、

より効果な文的化型が生まれ、型の継続性の面に於ける統一
 のタイプたる文化体制が出来上る。

文化体制は勿論パーソナリティ体制や社会体制に帰すべか
 らざる独特の統一の形式と問題をも持つてはいる。然し之は
 常に凡有る行動の指向の目標であり、要素であることを特徴
 とする。だから之は人格的・社会的各体制の行為に具現する
 のであるが、独自のイデオロギー其の他象徴体系乃至道徳体
 系ともなり得るが、自ら組織化されて一つの行動体制となる
 ことはない。

(五)

臨床心理的な考え方を一つの極とするケースの研究は何時
 も特殊のシチュエーションの独特な行動や特殊な人間の事態
 を課題として追求する。そして何十回と無く続けられる面接
 により右往左往し乍ら深層洞察へ導いて行く。實際それは治
 療であり端的に言えは寧ろクライエント自身の教育なのだか
 ら、治療者があせつて一人で直ぐ洞察理解したとしても効果
 はないわけであらう。

茲にロージャースのように面談は最も重要ではあるが個人
 の問題に對する唯一の方法ではないとして、(一)制度的な予防
 的手段、(二)環境的措置、(三)面談による直接的治療の三者を挙
 げ乍ら「社会事業の分野におけるケースワーカーは従来社
 会事業の役割として考えられている要因、即ち貧困者救済、

職業斡旋・医療救治等ばかりでなく、更にしかも恐らくすべての中で最も重要なものであり、すなわち相談助言による援助を患者達に積極的に提供しているのである。」と言う主張の基盤がある。

然し実際には社会事業の対象たる現実の世界は今少し総合的のものであるのみならず、又彼の挙げた三方法を実際の対象に当つて見ると、決して夫々独自の体系を持ち他を排除する対象を持つたものでないばかりか、却つて之等がからみ合ひ、例えば職業輔導に依つて職業への自信を得、同時に父親としての役割と役割期待の場の見透しが只知識としてでなくプロセス乃至自発的参加に於て把え得たという如きは最も自然な日常茶飯事なのだと言える。

だから実際には、臨床的面談以外の方法も例えば若しワーカー自体の予備知識を高め教育する場合等には少なくとも不必要とは云えまい。例えば上述三体制理論に於て、不適応の事態を夫々パーソナル体制・社会体制・文化体制の各部面に割り付けることは、誰にでも直ぐ出来ることであるし、此の三体制間の組み合わせの間に葛藤と困難とを考慮することも不可能ではない。そしてケース・ワークの技術には必ずしも個人心理面のみを中心として垂直に縦に縦にと進む洞察の線に沿つて事態を明らかにする面談治療的な一面のみでなく、種々の体制間に於ける難点又はデイスオルガニゼーションの解決とその効果の影響が関連する他の面に如何に及ぶかを考慮

する、より総合的な点も含まれるのは勿論臨床的面談自体にさえ必要だと見得るとするなら、上述パースンズの図式や又ホームマンズの小グループ内の人間関係をアウト・グループの外的体制とイン・グループの内的体制に分け、各体制は関係者の行為・感情・相互作用及びおきての四者の相関だとする具体的な人間集団に基礎を置く分析の如きは、もつと利用されてよいのではなからうか。

附記 編集者から与えられた課題はケース・ワークの基礎という恐ろしいものだつたのだけれど、時間も無かつたせいで、只の外部からする素人的断想に過ぎないものに了つたことを深くお詫びし、パースンズ等の *Toward a general theory of action* を参考としたことを附記しておきます。

(註) 斯う見ると只社会的困難を固定的、状態的に三体制に分けるようになるが、元来パースンズは三体制を一社会行為の三面と見るのだから、問題即ち偏倚行動は一面自己のパーソナリティに対する適応の問題であり、又他人との相互作用の過程に於ける問題乃至個人がそれに依つて社会に組み込まれている一つ乃至多数の役割に対する社会的期待を充たし得ぬ行動である。例えば何か一つの偏つた行動の心理的逃避は不安、恐怖であり、社会的には敵対等の対人関係となる。然し現実には却つて一つの体制に対する偏りは他の体制への適応を切り離して選択する故に生ずることがあり、結局実際の変化過程の科学的追求は重要な一つの面にのみ着眼することが必要である場合が多い。従つて又或る文化的事態では偏倚行動の一部は社会的に寧ろ一個の役割と化し、それ故

に之を選択の動機とする行為さえ生れるのである。

斯様な観方はマイルスの云うように、最近米国の社会事業の対象が余りに個人的になつて家族、近隣、社会が忘れられ、雇用、保険、其の他の経済的措置が過少評価され、ケース・ワークは精神分析のみの偏つた接近で行われ、その缺點に社会科学、文化的知識の劣弱が挙げられていると方向を一新するのではあるまいか。(A. P. Miles—American

Social Work Theory, 1964)

トロント、ニュー・ヨークだより

社会福祉学科講師

早崎 八洲

六月十九日土曜日の晩、雨の降るなかを羽田から飛んで、ウエイタ、ホノルル、桑港、シカゴを通つて廿一日午後カナダのトロント市に來ました。わたしたちのウイメンズもいですが、(いくらおくれでもしかられないので)、トロント大学のキヤムバスはまつたくリフレッシングで、私のうちの芝生より広くて、私はここでたのまれたらアゲアシトリの調子かサイエンス・オヴ・アゲアシトリの講座を開こうかと思つた位です。芝生にポプラとメイプルが大きく生えて、黒いリスがチロロチロロかけ廻つて、人の足もとに來て立ちあがつて前脚でおがむようにする有様には、まつたくトロントしました。世界で動物を見るといじめるのは、日本人とスペイン人の子供だと思ふのですがどうです。

『アミアンの野に春ふたたびめぐり來て
ひばりうたい、ひなぎくの花ひらくとき
我れ等の友はさむることなくして
ここにわむる (トロント大学校庭の職
致学友のエピタフより)』

第七回国際社会事業会議は大学構内で開かれました。協議題は「セルフ・ヘルプ」の公用語は英、仏、四十八カ国から二千五百人の社会事業家が出席、うち三分の二が婦人で

した。二十四、五、六が常任委員会、廿七日から七月二日迄が大会、大会は五つの総会と四つのパネルと廿の研究部会とからなつていました。私は第二パネルのデイスカッション・メンバード、他のメンバードはアメリカのミス・ホーイ、ドクタリー・クラインバーグ、ドイツのエヴァインデエリカル・チャーチのブッフアト師で、「私としては以て限すべし」という人で、議長はインドのミスター・デイタつしやでした。

三日このアメリカン・インディアンの種族ヒューロンの言葉で、「集会場」を意味するトロントをあとにして、三十年振りニュー・ヨークに來ました。黒人人口の殖えたこと、一流ホテルのうちでも私のうちのフアンより古い電扇をつかっているものがあるのには一寸考えさせられました。無駄な程とんでもなく高い家や、要するに見せ物以外何物でもないビルディングを見たり、人殺しの新聞を認んだりしました。パカカの、時計や安全カミソリ等は日本にもあるので買いません。ホールド・アップにも会いませんから御安心を、皆さんよく勉強してはいますか。(七・四)